

2020年8月9日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「神と民の狭間に生きて」

聖書：出エジプト記3:1～15

私たちは様々な「はざま」の中に生きている。家庭、学校、職場、国や地域の中の狭間に置かれている。モーセはまさに狭間の申し子とも言える。ヘブライ人でありながらエジプト人として育ち、ヘブライ人とエジプト人の狭間に生きた。モーセが成人し、いつの頃からか、実は自分がヘブライ人の血が流れていることに気づかされ、自らのアイデンティティーに悩み葛藤する。ある時、同胞であるヘブライ人の過酷な重労働、鞭打たれる姿を見かねて、モーセは暴力を持ってその場の解決を図った。しかし、「暴力」は決して平和や和解をもたらすものではない。モーセは、その狭間に在って同化しようと努めるが、自らの力では成しえず、むしろ彼自身がもうこの地にいることさえ出来ず、逃亡者となった。

モーセは、ミディヤンの地で羊飼いととしての道を歩んでいた。過去を捨て、身を隠して安定した生活を営んでいた。ある時、羊の群れを荒れ野の奥へ追っていると、不思議な光景に出くわす。燃えているのに燃え尽きない柴を見つける。モーセは、しばし「道をそれて」神に出会う。そして、神の前に立ち、燃える柴に炙られていく。モーセはそこで「わたしは何者でしょう」と自己を問い、又神は何というお方なのかと神を問う。人の狭間に生きることを避け、寄留者となったモーセを、神は再び「はざま」の中に追いやる。ただ以前と違うことは、その狭間に神が先立ち、「あなたと共にいる」と神は約束されたのであった。

「狭間に生きる」とは何か。モーセが人の狭間に立った時、結局は人間的な行為により、そこを追われ、その狭間に生きられなかった。しかし今や、モーセは神と民の狭間に生きようとする時、彼は豊かに神に用いられた。燃える柴に炙られながら、神に向き合い、民に向き合って生きようとする。このことは、日常の生活をしばしそれて、人の道をそれて、主の日の礼拝に集い、神の燃える柴に炙られていく必要を教えている。日常の生活のみに追われていないか？神を礼拝しているか？と問う。今、コロナ感染拡大の中で思うように教会には集まれないが、しかし今いる所で静かに礼拝を捧げて行けるよう互いに励まし合いながらこの時期を耐えて行きたい。

もう一つ。私たちの教会は、神と民の狭間に生きる教会としての歩みを成しているだろうか？社会の問題に向き合い、神と民の狭間に生きる教会としての歩みを進めているだろうか？その事もまた問われていることを覚えたい。

ただ、私たちのあらゆる「はざま」には、到底越える事の出来ない問題もあろう。しかし、忘れてならないことは、私たちの神は、たとえ底の見えぬ深い海が私たちの行く手を閉ざしたとしても、神が必要とするならば、私たちを向こう岸に渡らせるためにはその海を真っ二つに裂き、道を切り開いてくださるのである。その神を礼拝しつつ、希望を持って一緒に歩んで行こう。(神谷)